♪われは海の子

一、我は海の子白浪（しらなみ）の
さわぐいそべの松原（まつばら）に
煙（けむり）たなびくとまやこそ
我がなつかしき住家（すみか）なれ

二、生れてしおに浴して（ゆあみして）
浪（なみ）を子守（こもり）の歌と聞き
千里（せんり）寄せくる（よせくる）海の気（き）を
吸いて（すいて）わらべとなりにけり

三、高く鼻つく（はなつく）いその香（か）に
不断の（ふだん）花のかおりあり
なぎさの松に吹く風を
いみじき楽（がく）と我は聞く

♪浜辺の歌

一、あした浜辺を　さまよえば
昔のことぞ　しのばるる
風の音よ　雲のさまよ
よする波も　かいの色も

二、ゆうべ浜辺を　もとおれば
昔の人ぞ　しのばるる
寄する（よする）波よ　かえす波よ
月の色も　星のかげも

♪浜千鳥

一、青い月夜の　浜辺には
親を探して　鳴く鳥が
波の国から　生まれでる
濡れた（ぬれた）つばさの　銀の色

二、夜鳴く鳥の　悲しさは
親を尋ねて（たずねて）　海こえて
月夜の国へ　消えてゆく
銀のつばさの　浜千鳥

♪砂山

一、海は荒海　向こうは佐渡よ
すずめなけなけ　もう日は暮れた
みんな呼べ呼べ　お星さま出たぞ

二、暮れりゃ砂山　汐鳴（しおなり）ばかり
すずめちりぢり　また風荒れる
みんなちりぢり　もう誰も見えぬ

三、かえろかえろよ　茱萸原（ぐみわら）わけて
すずめさよなら　さよならあした
海よさよなら　さよならあした

♪春よ来い

一、春よ来い　早く来い
あるきはじめた　みいちゃんが
赤い鼻緒（はなお）の　じょじょはいて
おんもへ出たいと　待っている

二、春よ来い　早く来い
おうちの前の　桃の木の
蕾（つぼみ）もみんな　ふくらんで
はよ咲きたいと　待っている

※一番をもう一度

♪さくらさくら

さくら　さくら
やよいの空は
見わたすかぎり
かすみか雲か
匂いぞ（においぞ）
出ずる（いずる）
いざや　いざや
見にゆかん

※繰り返します。

♪霞か雲か

一、かすみか雲か　はたゆきか
とばかり　におう　その花ざかり
ももとりさえも　うたうなり

二、かすみははなを　へだつれど
隔てぬ（へだてぬ）友と　きてみるばかり
うれしき事は　世にもなし

三、かすみてそれと　みえねども
なく鶯（うぐいす）に　さそわれつつも
いつしか来ぬる（きぬる）　はなのかげ

♪春の小川

一、春の小川は　さらさらいくよ
岸のすみれや　れんげの花に
すがたやさしく　色うつくしく
咲いているねと　ささやきながら

二、春の小川は　さらさらいくよ
えびやめだかや　小ぶなの群れ（むれ）に
きょうも一日　ひなたでおよぎ
遊べ遊べと　ささやきながら

♪夏は来ぬ

一、卯(う)の花の　匂う垣根に
時鳥(ほととぎす)　早も来鳴きて
忍音(しのびね)もらす　夏は来ぬ

二、さみだれの　そそぐ山田に
早乙女(さおとめ)が　裳裾(もすそ)ぬらして
玉苗(たまなえ)植うる　夏は来ぬ

三、橘(たちばな)の　薫るのきばの
窓近く　蛍飛びかい
おこたり諌むる(いさむる)　夏は来ぬ

四、棟(おうち)ちる　川べの宿の
門(かど)遠く　水鶏(くいな)声して
夕月すずしき　夏は来ぬ

五、五月(さつき)やみ　蛍飛びかい
水鶏(くいな)鳴き　卯の花咲きて
早苗(さなえ)植えわたす　夏は来ぬ

♪虫のこえ

一、あれ松虫（まつむし）が　鳴いている
ちんちろちんちろ　ちんちろりん
あれ鈴虫（すずむし）も　鳴き出した
りんりんりんりん　りいんりん
秋の夜長（よなが）を　鳴き通す
ああおもしろい　虫のこえ

二、きりきりきりきり　きりぎりす
がちゃがちゃがちゃがちゃ　くつわ虫
あとから馬おい　おいついて
ちょんちょんちょんちょん　すいっちょん
秋の夜長を　鳴き通す
ああおもしろい　虫のこえ

※一番をもう一度

♪冬の夜

一、燈火（ともしび）ちかく衣縫う（きぬぬう）母は
春の遊（あそび）の楽しさ語る
居並ぶ（いならぶ）子どもは指を折りつつ
日数（ひかず）かぞえて喜び勇む（いさむ）
囲炉裏火（いろりび）はとろとろ
外は吹雪（ふぶき）

二、囲炉裏（いろり）のはたに縄なう（なわなう）父は
過ぎしいくさの手柄（てがら）を語る
居並ぶ子どもはねむさ忘れて
耳を傾け（かたむけ）こぶしを握る（にぎる）
囲炉裏火はとろとろ
外は吹雪

♪赤い靴

一、赤い靴　はいてた
女の子
異人さん（いじんさん）に連れられて
行っちゃった

二、横浜の　はとばから
船に乗って
異人さんに連れられて
行っちゃった

三、今では　青い目に
なっちゃって
異人さんのお国に
いるんだろ

四、赤い靴　見るたび
かんがえる
異人さんに逢う（あう）たび
かんがえる

♪雨

一、雨がふります　雨がふる
遊びにゆきたし　傘はなし
紅緒（べにお）の木履（かっこ）も　緒（お）が切れた

二、雨がふります　雨がふる
いやでもお家（おうち）で　遊びましょう
千代紙（ちよがみ）おりましょう　たたみましょう

三、雨がふります　雨がふる
けんけん小雉子（こきじ）が　今啼いた（ないた）
小雉子も寒かろ　寂しかろ（さびしかろ）

四、雨がふります　雨がふる
お人形寝かせど　まだ止まぬ（やまぬ）
お線香（おせんこう）花火も　みな焚いた（たいた）

五、雨がふります　雨がふる
昼もふるふる　夜もふる
雨がふります　雨がふる

♪兎のダンス

一、ソソラ　ソラ　ソラ　兎のダンス
タラッタ　ラッタ　ラッタ
ラッタ　ラッタ　ラッタラ
脚（あし）で　蹴り（けり）蹴り
ピョッコ　ピョッコ　踊る
耳に鉢巻（はちまき）
ラッタ　ラッタ　ラッタラ

二、ソソラ　ソラ　ソラ　可愛い（かわいい）ダンス
タラッタ　ラッタ　ラッタ
ラッタ　ラッタ　ラッタラ
とんで　跳ね（はね）跳ね
ピョッコ　ピョッコ　踊る
脚に赤靴（あかぐつ）
ラッタ　ラッタ　ラッタラ

※一番をもう一度

♪りんごのひとりごと

一、私は真っ赤な（まっかな）りんごです
お国は寒い北の国
りんご畑の晴れた日に
箱につめられ汽車ぽっぽ
町の市場へつきました
りんご　りんご　りんご
りんご　可愛い（かわいい）　ひとりごと

二、くだもの店のおじさんに
お顔をきれいにみがかれて
皆んな（みんな）並んだお店先
青いお空を見るたびに

りんご畑を思い出す
りんご　りんご　りんご
りんご　可愛い　ひとりごと

三、今頃（いまごろ）どうしているかしら
りんご畑のお爺さん（おじいさん）
箱にりんごをつめながら
歌をうたっているかしら
煙草（たばこ）をふかしているかしら
りんご　りんご　りんご
りんご　可愛い　ひとりごと

♪叱られて

一、叱られて　叱られて
あの子は町まで　お使いに
この子は坊やを　ねんねしな
夕べさみしい　村はずれ
こんときつねが　なきゃせぬか

二、叱られて　叱られて
口には出さねど　眼（め）になみだ
二人のお里は　あの山を
越えてあなたの　花のむら
ほんに花見は　いつのこと

♪待ちぼうけ

一、待ちぼうけ　待ちぼうけ
ある日せっせと　野良（のら）かせぎ
そこへ兎（うさぎ）が飛んで出て
ころり　ころげた　木のねっこ

二、待ちぼうけ　待ちぼうけ
しめた　これから寝（ね）て待とか
待てば獲（え）ものは　駆（か）けて来る
兎ぶつかれ　木のねっこ

三、待ちぼうけ　待ちぼうけ
昨日（きのう）鍬（くわ）とり　畑仕事（はたしごと）
今日は頬（ほお）づえ　日向（ひなた）ぼこ
うまい伐（き）り株（かぶ）　木のねっこ

四、待ちぼうけ　待ちぼうけ
今日（きょう）は今日はで　待ちぼうけ
明日（あす）は明日はで　森のそと
兎待ち待ち　木のねっこ

五、待ちぼうけ　待ちぼうけ
もとは涼しい黍畑（きびばたけ）
いまは荒野（あれの）の箒草（ほうきぐさ）
寒い北風　木のねっこ

♪散歩唱歌

一、来れや友よ　打つれて
愉快に今日は　散歩せん
日は暖かく　雲はれて
けしき勝れて（すぐれて）　よき野辺に

二、空気の清き　野にいでて
唱歌うたわん　もろともに
急げ　花ある処（ところ）まで
急げ　草つむ処まで

三、見返るあとに　霞みつつ
立てるは　村の松の影
吾行く先に　心地よく
躍るは　川の水の声

四、蹈めば（ふめば）　音ある板橋を
渡る袂（たもと）に　吹き来るは
もつれし土手（どて）の　糸柳（いとやなぎ）
ときしあまりの　春の風

五、黄なる（きなる）菜のはな　青き麦
錦（にしき）と見ゆる　野のおもの
ここやかしこに　おりのぼる
雲雀（ひばり）のうたの　おもしろさ

♪鉄道唱歌

一、汽笛一声新橋を　はや我汽車は離れたり

愛宕の山（あたごのやま）に入りのこる
月を旅路の友として

二、右は高輪泉岳寺（たかなわせんがくじ）
四十七士の墓どころ
雪は消えても消えのこる
名は千載の（せんざいの）後までも

（中略）（間奏なし）

五、鶴見神奈川あとにして　ゆけば横浜ステーション
湊（みなと）を見れば百舟（ももふね）の
煙は空をこがすまで

六、横須賀ゆきは乗換と　呼ばれておるる大船の
つぎは鎌倉鶴ケ岡
源氏の古跡（こせき）や尋ね見ん

（中略）（間奏なし）

六五、おもえば夢か時のまに　五十三次はしりきて
神戸のやどに身をおくも
人に翼の汽車の恩

六六、明けなば更に乗りかえて　山陽道を進まましし
天気はあすも望あり
柳にかすむ月の影

♪箱根の山

第一章

箱根の山は　天下の険
函谷関（かんこくかん）も　物ならず
万丈（ばんじょう）の山　千仞（せんじん）の谷
前に聳え（そびえ）　後に（しりえに）支う（さそう）

雲は山をめぐり
霧は谷をとざす

昼なお暗き杉の並木
羊腸（ようちょう）の小径（しょうけい）は苔（こけ）滑らか
一夫関（いっぷかん）に当るや
万夫（ばんぷ）も開くなし

天下に旅する　剛毅（ごうき）の武士（もののふ）
大刀（だいとう）腰に　足駄（あしだ）がけ
八里の岩ね踏み鳴す（ならす）
斯く（かく）こそありしか
往時（おうじ）の武士（もののふ）

（間奏なしで、第二章へ）

箱根の山は　天下の阻（そ）
蜀（しょく）の桟道（さんどう）　数（かず）ならず
万丈（ばんじょう）の山　千仞（せんじん）の谷
前に聳え（そびえ）　後に（しりえに）支う（さそう）

雲は山をめぐり
霧は谷をとざす

昼なお暗き杉の並木
羊腸（ようちょう）の小径（しょうけい）は苔（こけ）滑らか
一夫関（いっぷかん）に当るや
万夫（ばんぷ）も開くなし

山野（さんや）に狩する　剛毅（ごうき）の壮士（ますらお）
猟銃肩に　草鞋（わらじ）がけ
八里の岩ね　踏み破る
斯く（かく）こそありけれ
近時（きんじ）の壮士（ますらお）